

レンブラント「夜警(1642年)」の 鑑賞題材化(7段階鑑賞学習プログラム)の試みⅡ

—集団肖像画の読解的鑑賞の一局面(形式的分析,知識補填[情報提供],補充課題を中心に)—

An Experimental Study on Making Art Appreciation Teaching Materials (The Seven-Stage Learning Program) by Using Rembrandt's "The Night Watch (1642)" II

An Investigation of One Aspect of Reading-Based Appreciation of Group Portraits with a Central Focus on Formal Analysis, the Supplementation of Knowledge (the Provision of Information) and Replenishment Subjects

岡田匡史¹

Masashi Okada¹

[要旨] 本稿は連稿後篇となる。前稿でレンブラント「夜警」読解に際し、7段階・15項目で成る鑑賞学習プログラムを提起し、第1・3段階(観察,解釈)を論じたが、本稿では第2・4・7段階(形式的分析,知識補填[情報提供],補充課題)を扱った。第5・6段階(再解釈,判断&評価)は別の機会に譲る。第2段階で油絵の具の賦彩特性と画面構成上の特質を挙げ、形式的状態に主題把握に通ずる道筋が潜む点に言及した。第4段階の主要論題は、美術史的背景、図像学的特徴、エピソードとした。美術史学習の進め方に関し、藤井聡子・梶木尚美による歴史学習と絵画鑑賞を連結する教科横断型授業実践を参照した。図像学的観点から「夜警」を解す試みや、補助的だが時に主題に直結しもあるエピソードの機能も論じた。第7段階(補充課題)では、東西比較、絵を聴く、自画像探し、ロールプレイ、脱整列型記念写真撮影を概説し、本稿を締め括った。

[Abstract] This is the second article on reading-based appreciation of Rembrandt's "The Night Watch (1642)." In the first article, the author proposed a seven-stage learning program and discussed the first and third stages: observation and interpretation. Here he considers the second, fourth and seventh stages: formal analysis, the supplementation of knowledge including the provision of information and replenishment subjects. He selects the painterly quality of oil paints and the structural features of composition as main themes of the second stage and mentions that in even formal state, a path leading to grasping subject exists. The issues of the fourth stage are art historical backgrounds, iconographical examinations and episodes. He learned a lot from a collaboration by Satoko Fujii and Naomi Kajiki, which is a cross-disciplinary class practice between history and art. Then he explains how to interpret "The Night Watch" from the iconographical perspective and researches the function of episode. In his opinion, episode plays an ancillary roll on understanding artwork, but sometimes relates to its essential sides. At last he shows his concepts on five topics in the seventh stage, which are an East-West comparison, listening to a painting, searching Rembrandt's self-portrait, role-playing and shooting a dealigned commemorative class photography.

[キーワード] 読解的鑑賞, レンブラント, 夜警, 教科横断型学習, 7段階鑑賞学習プログラム

[Key words] Reading-based appreciation, Rembrandt, The Night Watch, Cross-disciplinary learning, Seven-stage learning program

[所属] ¹信州大学 (Shinshu University)

[受理日] 2018年12月25日

1 はじめに

本稿は同題(副題は異なる)の前稿¹の続篇である。

前稿では、17世紀オランダ集団肖像画に着目し、本系譜の革新とも異端とも解される作例として鑑賞対象に選定した「夜警」(図1)概説²に続き、本作を扱う鑑賞題材の基本構想を導く二種先行資料、神林恒道の「夜警」の見方・読み方を教えるガイド的解説³と、堀典子の「夜警」の鑑賞授業実践報告⁴を挙げ要点を述べた。

その上で、読解主軸の鑑賞指導(想定学習者は日本の中学生)を行うに当たり提案したのが、1. 観察(+記述・

発表[視覚的体験の言語化]), 2. 形式的分析, 3. 解釈, 4. 知識補填(生徒側)←情報提供(教師側), 5. 再解釈, 6. 判断&評価, 7. 補充課題(5つの選択肢)の7段階で成る鑑賞学習プログラム⁵である。本案は、作品批評能力の精緻化を期し、エドモンド・バーク・フェルドマンが練り上げた、記述(観察重視)、分析(主に形式面)、解釈、評価で成る4段階批評法を骨組とし、調査・知識獲得・熟考ベースの2つの段階として調べ学習の展開と再解釈を挿入し、さらに弾力的設置を念頭に置く補充課題(計5種)を創案し肉付けを図った。

その流れからすると、始動時の観察主体の学習を扱う

節に続き、本来ならば形・色彩・構図等を扱う形式的分析に関し論じるべきであり、当初、画中要素を名付け言語化し意味を追う観察（含記述）段階から、視点を変え、造形要素群の形式的特質を追う、より客観的でしかも造形特性の本質的把握へと導く分析過程に移る例を、「夜警」鑑賞のケースで押さえようとした。が、そうならなかった。観察と自由解釈の結び付き（個別的意味の確認から総合的解釈の起動への接続）が、「夜警」の場合、虚構性と迫真性が入り混じるせい、特に強く、両者は緊密に連動し、読解的鑑賞の本流を形成するとも判断し、前稿では観察から自由解釈の流れで先ず論を進めた。

よって、形式的分析（実はここにも解釈的次元が生起するのだが）は、続くこの位置で見解を整理したい。

なお、紙数制限を念頭に置き、本稿での考察対象は第2・4・7段階（形式的分析、知識補填〔情報提供〕、補充課題）に絞り、第5・6段階（再解釈、判断&評価）は別の機会に論じたい。補充課題では計5項目を扱う。



図1：レンブラント・ハルメンスゾーン・ファン・レイン（Rembrandt Harmensz. van Rijn）「夜警（隊長フランス・バニング・コックと副官ウィレム・ファン・ライテンブルフの市民隊）」1642年カンヴァス、油彩 379.5 × 453.5 cm アムステルダム、国立美術館
画像出典：https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/0/07/Rembrandt_Harmensz._van_Rijn_-_Nachtwacht_-_Google_Art_Project.jpg



図2：副官の服の刺繍模様（獅子像と×字3個）と隊長の左手の影 [左]、鶏足・銀縁付き角製酒盃・巾着を携帯する女兒（手前に小柄な銃士） [中]、肩越しに見違る男の目（自画像？） [右]
画像出典：図1と同じ（3点何れも図1の部分図）。

2 題材設計上の重点事項（前稿続き）

2-1 形式的特質の分析的探求

絵を読むことに重点を置く場合、観察が記述と合一する傾向性には十分留意したい。目は読むとも考え得る。

対象の一般的な視認様式、「それは～である」との名辞的理解を踏まえるならば、観察（見る）が自由解釈（読む）を生じさせるのは標準的流れと解される。

鑑賞行為を概説すると、画面の観察に始まり、対象を知覚・識別・想像・解釈しながら言葉として列挙する活動が進む。その働き・用途・機能は何か、特に初めて見る物でよく解らぬ時は疑問を核に言語化を図り、その途次、解釈が自ずと起動する。リストアップ過程で確認作業が強化されると共に、視認対象相互間の意味的連関に気付きながら、絵全体が放つメッセージを読み解く段階に到る。そうして様々な観点より自由解釈が進展する。

ただ上記過程だと、絵の造形単位や骨組・構図（画面構築術）等と関わる構造的追求が置き去りとなったり、様式特性の把握や賦彩法の技術的理解が後回しとなったりしがちである。これら形式的諸側面にも関心が向く時、絵の多層型読解がもたらされると考える。なぜなら、形式的諸側面も意味生成に関与し得るからである。

絵を前提とする形式的分析の主要対象項目は、立体・彫刻よりも幅広く多様かも知れない。前稿図2に示した通り、「夜警」の場合、画中諸対象の「形・色彩・材質感、油絵の具の多種賦彩法⁶、画面の形状、明暗法、遠近法、人物の彫像的塊性や動勢、描写精度の幅、各部の短縮法的処理、ポーズ、顔の表情（喜怒哀楽の源）、空間（余白・背景）、構図即ち諸要素の組立て・配置構成・統合的組織等⁷」を列挙でき、絵の様式特性とも密に関わるタッチ⁸ フラッシュストローク⁹を個別に加えることも可能である。

上掲列記事項の内、ここでは油絵の具が中軸を成す賦彩法（殊に多様な筆致）と構図特性にフォーカスする。

(1) 油絵の具を扱うレンブラント流賦彩法

グザヴィエ・ド・ラングレが紹介する重合亜麻仁油¹⁰（通称オランダ油）をレンブラントも熟知していたであろうことは想像に難くない⁸。粘稠性が高く、精油類での稀釈を要すが、樹脂との相性がよく、「きわめて柔軟で滑らかで耐久性のある被膜⁹」は、筆者も体験済である。

この種の調合油を自在に駆使し、レンブラントが油絵の具に「独自の生¹⁰」を獲得させる筆捌きを、シャーマは、「重なる、引きずる、振じる、はねる、したたる、包む、濡れそぼつ、こねる、引っ掻く¹¹」と表現した。

上記見解は、レンブラントの晩期肖像画群の技法特性に関する、ケネス・クラークの次の分析に重なる。

「事実それらの作品の画面は、ぼかしたり、引っかいたり、艶出しをしたり、あらゆる種類の絵画の手法を駆使しており、絵筆やパレット・ナイフによる細かいタッチを、前の絵具の層が乾いたあとで塗り重ねるということもやっている。」¹²

「夜警」はかかる各種賦彩法の複合体だと言っても過言ではあるまい。レンブラントの絵全般の特徴である。

だから、彼の場合、現実界と見紛うばかりの写実主義だけで絵を評すのは適切とは言えない。多彩に施された絵の具を凝視すべきなのである¹³。

イメージを前に忘却しがちなのは、形像が非物質的現れでなく絵の具なる物質的媒材でできている事実である。イメージが前景化する時、それを形作る絵の具は物質特性を隠蔽するかのごとく控え目に退く。筆跡を極力消去し、「漆塗りのような滑らかさ」¹⁴を完成基準に掲げるヘリット・ダウ（レンブラントの一番目の弟子）らを中心とするライデン精緻画派に適用できる特質である。が、レンブラントは違った。

対象を表すのに一通りの描法に則る必要は無く、描法は対象をどう感受・認識・判断等するか即して工夫すべきで、違う仕方を同一画面で試みるのも許容可だと解す視点は、生徒達が取り組む絵画表現領野を活性化するだろう。加うるに、絵の具それ自体が発する感情・精神性・人間的特質等も、絵の奥深さに触れ得る鑑賞契機をもたらす要素群と把握できれば、画面観察を通じ物質的次元の面白さを伴う絵画的追求が促されるだろう。

なお、本側面の論考は、筆者に課された宿題である。立原慶一は、『色・明暗（彩色法）』、『形・構成（構図法・空間構成法）』、『筆づかい・線（描写法）』¹⁵等、形式的な造形特徴の美的感受を論じ、それと主題感受との連結度を探る研究を一貫して展開しており参照したい。

(2) 「夜警」の画面構成上の特質

兼重譲がまとめた「夜警」の履歴¹⁶によると、本作はアムステルダム市内を数度移動した。最初（完成直後）の設置場所は市警備隊（銃手組合）本部。1715年、ここから市庁舎（現在の王宮）の軍事法廷室に移る際、小さな面積の壁に納めるべく絵の四方が切断された（最大は左側空間で約60cmも切除）。1808年の貴族邸トリッペンハイイス移設の後、1885年、建設を終えた国立美術館に収蔵され、現在に到る。

切断前の状態は、ヘリット・リュンデンスの「夜警」模写（1650年頃）で或程度確認できる。模作はナショナル・ギャラリー（ロンドン）蔵だが、「1958年以来アムステルダム国立美術館に貸与」¹⁷となり、筆者も国立美術館で仔細に観察できた。

それを見ると、ほぼ中央に位置する門から放射状に空間が拡がるのが解る。つまり「夜警」は意外にも元々は左右対称型の古典的構図でできていた。

因に、クラーク卿は、「夜警」が、動勢や演劇性が豊かで複雑な構図を示すバロック様式とは袂を分かつとの認識を示し、寧ろヴァチカン宮殿ラファエッロの間を飾るフレスコ群との類似性を見出し、当時オランダに流布した直刻銅版画（エンブレヴィング）を通じての、ラファエッロの盛期ルネサンス様式からの影響を指摘した¹⁸。

以下、上記構図特性と関わるシャーマの模写観察に基づく画面構成の分析である。

「左端に（弾薬運搬小僧が沿って走る）長い運河の欄干がきちんと加わると、敷石道の縁（へり）とともにレンブラントの遠近法の対角線が構成されるはずなのだ。この遠近法は、そこから一隊（アーチ）が出現中の拱門の大門の中心に消失点を持つ。」¹⁹

そして、切断前の状態を想像してこう記した。

「絵左端のこれらの線はまた、我々が現在目にする短縮ヴァージョンで伝わるよりはるかにはっきり具体的な場所を——練兵館正面の運河橋だ、と——指示してくれるだろう。」²⁰

さらに本構成を市警備隊の使命感、「絵の道徳的な存在理由」²¹の象徴とも捉え、「アムステルダムを守り、とは即ち門を、橋を、運河をこそ守るが大任の一隊」²²なる理念がこの野外劇場的な画面構成に込められたと説く。

切断は構図的変更にと留まらず、表現主題を見えなくしてしまう側面を解析したシャーマは、一步踏み込み、機械工学的とも言えそうな観点から、画面構築上の原理を考え抜く²³。それは構図の読解と評価できる。

杖、銃、旗、槍、矛等の直線的モチーフが機構部品の役割を担い、動力源たるバニング・コック隊長の出陣命令（短縮法の適用で画面を突き出そう程の手と第一歩を印す脚を伴う）でそれらが猛烈に始動し、同時に制御が働く、といったイメージで構図特性が把握される。そこに現出するメカニク的な構造を、シャーマは扇もしくは孔雀の拡げた羽根に譬える。

こうした構図理解は、予備知識が乏しいがゆえ先入見の悪影響を回避できる中学生の鑑賞で参考となろう。

その構図観は、バロック絵画の内に、各要素の細部尊重とそれらの集合（悪く言うと寄せ集め）の静的次元を越える、それらが錯綜的關係性の中で全体を成し熱量を増すような配置構成の動的次元を捉えようとした、ハインリヒ・ヴェルフリンの見方に近い。次は「夜警」の表現特性を言い当てかのような彼の見解である。

「ところが、今やバロックでは時間が縮小され、表現は実際に行為の短時間のクライマックスだけを捉えるのである。」²⁴

2-2 知識補填（生徒側）と情報提供（教師側）

「夜警」の理解を増し広げる上で、中核を担うのが第4段階である。ここは調べ学習を柱とするが、学習指導的観点より二形態を想定し、知識補填（生徒側）と情報提供（教師側）の連動・循環で成り立つと解する。

また、生徒達が学ぶ内容の観点からは、美術史的背景、図像学的特徴、エピソードの3つを考えている。

知識を得る方途・媒体は、図書館蔵書かインターネットかの2つを想定し、後者の場合は情報検索用機器としてタブレットPCを有用視する。

授業進行だが、個別に情報収集に専心してから班活動に移り、班内で情報交換を行う中で、班員相互で情報の適切性を吟味したり、知識を補充し合ったりする。調査成果発表は班単位で行うが、タブレットPCのワープロソフトで共有情報・討論内容等を文章化したり、プレゼンテーションソフトで調査成果をまとめたりするようなICT機器活用を学ぶ機会ともしたい。

(1) 教科横断型の美術史学習の可能性

前稿執筆後、大阪教育大学附属高等学校池田校舎の藤井聡子（世界史担当教諭）・梶木尚美（司書教諭）の実践報告資料「絵画の読み解きで、時代をつかむ！—17・18世紀のヨーロッパ」²⁵を読み、VTSベースの総合的な教科横断型鑑賞学習²⁶に触れ、第4段階の在り方を多角的に再検討すべきと考えるに到った。

地理歴史科と学校図書館が協働する世界史の授業であり、実践報告資料には次の本時目標を確認できた。

「絵画資料を多面的・多角的に見て推論を立てる。班員で協同して図書などから実際のところを調べ、絵画が描かれた時代とつなげながら、他者との議論を通してより合理性の高い解釈を選択する。」²⁷

知識伝授型の暗記科目からの脱却を図り、教師主導に陥り易い文化史学習を生徒達の主体的探究を基軸に再構築すべく、藤井・梶木は、先ず読書を重視し、絵を文化史学習を促す主幹資料とする段階で、思考力・読解力・言語活用能力等を養いつつ探求的学習態度形成を促すVTSメソッドを導入した。絵画鑑賞と西洋文化理解の統合を図る授業実践は極めて刺激的で参考となった。

「5. 指導計画」の「教科指導・学校図書館支援」欄（第二次・本時）に、「情報収集に必要な図書（またはリスト）を準備する。タブレットの活用指導（画像・意味検索など）。ワークシートの提案。成果物作成準備の

支援。チームティーチング」²⁸が列挙された。

紙数の関係で詳細は紹介できぬが、VTSを適用する比較鑑賞用絵画資料の1つに、レンブラントの代表的集団肖像画2点、即ち、「夜警」と「ニコラース・テュルプ博士の解剖学講義（1632年）」を組とした班活動用ワークシートもあった。生徒達は班での比較課題2点を巡る調査・討議後、そこにもう1点選んで加え、最終的に絵画作品3点と時代背景（「世界史ベースで解説」²⁹）で成る『名画鑑賞のしおり』を作成する。

実践報告資料には、上記2点に、「夜警」を酷評したウジェーヌ・フロマンタンが翻って絶賛した、レンブラント「布地組合の見本鑑査官（1662年）」³⁰（本作も集団肖像画）を班推奨作品として加え、色刷複写3枚と調査成果を記す付箋類を並べた生徒の成果物例を掲載しており、精緻な学びが伺え、本授業全段階が参考となった。

生徒達の調べ学習を補う教師側情報提供は必須だが、「教科内容に基盤を置いた情報提供者としての教員像から発想転換するべきである」³¹との藤井・梶木の主張は説得力を帯び、全面首肯は難しくとも熟慮に値しよう。

なお、前稿「2『夜警』の背景と基本的な表現特質の概説」³²で美術史的背景の要点を記したが、「夜警」を巡っては市警備の自治の伝統を押さえる必要がある。

射手組合は軍隊と近い市民の自治的防衛組織だが、オランダから戦闘が退き生活が平穏化すると、宴会・祝賀行進等を楽しむ社交場に変じ、構成員となり要職に就くことがステイタス・シンボルとなった。組合は画家に一堂勢揃いする集団肖像画を委嘱し、絵を記念写真の如く組合本部等に飾った。以上は小林頼子の要を得た解説³³の要約であり、「夜警」誕生の時代背景である。

(2) 「夜警」の図像学的読解の試み

次に図像学的読解の観点から、生徒達に調べてほしい諸点を整理する。

図像学的メソッドによる画中諸要素の解読は、前稿で論じた自由解釈³⁴の内にその萌芽を認め得る。形・色・数・配置・各種モチーフ等の意味の読み取りは生徒達にとって初め難解と映ろうが、習熟してくると面白さが増し、学習意欲も俄然湧いてくるだろうと期待している。気が付くと絵に関し多層的理解を獲得できている、それが図像学ベースの鑑賞学習の基本性格である。

先ずは「夜警」とアムステルダムの基礎自治体旗及び基礎自治体章（図3 [左] / [右]）との関連を見る。

2-1(2)で直線的モチーフが構図形成に果たす機能に言及したが、シャーマは読解を拡張し、杖・銃身・長槍・矛・旗棹等が斜めに放散型に伸びる様をX字に集約して捉え、この内部構造に画面右側に繰り返す長槍のX字型



図3：アムステルダムの基礎自治体旗〔左〕と基礎自治体章〔右〕
 画像出典〔左〕：
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/6/6d/Flag_of_Amsterdam.svg/1280px-Flag_of_Amsterdam.svg.png
 画像出典〔右〕：
https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/thumb/7/7d/Wapen_van_Amsterdam.svg/2129px-Wapen_van_Amsterdam.svg.png

交叉をも加え、聖アンデレが磔とされたX字型十字架と関係するとの見方を示した³⁵。市警備隊を描く「夜警」は、X字、即ち聖アンデレ十字を3回反復した形を有すアムステルダムの紋章と深奥で響き合う。しかもバニング・コック隊長が召す襲襟の白、衣装の黒、飾帯の赤は、基礎自治体旗の配色でもある。

隣の副官ファン・ライテンブルフの服や帽子にもアムステルダムもしくは市警備隊の象徴が鏤められている。ここはシャーマの観察成果を引用したい。

「そのコート縁を豪華に飾る模様を仔細に見ると、アムステルダムの紋章が取りこまれているし、帽子煙突部の付根や肩に垂れる飾りの打ち紐の青と金は、銃士隊(kloveniers)の、そして市の「戦争委員会(Krijgsraad)」、即ちアムステルダム市警軍最高司令部の色であったはずだからである。」³⁶

「夜警」所蔵館HPに本作の高解像度の精細画像がアップされており、拡大機能を使うと、絵の具の物質の様態、塗面の細微な罅、画布の織り目までもが識別可能となる³⁷。本機能で副官の刺繍模様を拡大すると、左右の縁に確かに立ち上がる獅子像と縦に並ぶX字3個を確かめ得る(図2〔左〕)。こうしたツールは生徒達も十分活用でき、ICT指導的観点から有用視される。

丹念な探索的観察を通じ、生徒達には他所にも市警備隊と関わる象徴が潜んでいるのに気付いてほしい。注視したいのは2名、足を踏ん張りマスケット銃を撃つ小柄な射撃手と、腰帯に逆様の鶏、角製酒盃、小銭入れと思しき巾着をぶら下げた女兒(兼重は「軽食の売り子」³⁸と推理)である(図2〔中〕)。前者の像は黒っぽい影、後者の像は眩しき光源のようで、両者は対照的性格を帯び配されるが、ここに寓喩が集中する。そこで、図像学的内容の詳細を示すシャーマの以下見解を参照したい。

「休儒銃士の兜を飾るカシの葉は少女達とともに、この作中一番はつきり寓意の部分である。勝利の象徴でもあることは言うまでもないが、徳、武力、そして

復活の象徴でさえもある。火縄銃隊不敗の象徴である。二人の少女も同様におそらくは銃士隊(kloveniers)の抽象的擬人化なのであり、その証拠には、猛禽の鉤爪(klaauw)が酒角に、また鶏の脚に形を変えた公式紋章に現われている。」³⁹

なお、よく見ると女兒は2名おり、両者が着る衣装には共に青と金の「市警軍組合の組合色」⁴⁰が認められる。

上記解説と重なるが、マリエット・ヴェステルマンも、火縄銃手隊が鶏足の爪の紋章を所有物総てに附したと記した⁴¹。加えて銀縁付き角製酒盃のタイプが市民隊の宴会で常用された点にも言及した⁴²。

ここで再提起したいのが、ICT機器利用のメリットである。実作鑑賞を目的に渡航・滞在費用を工面するのは現実的には難しい訳だが、展示現場に赴けたとしても、「夜警」の至近距離での集中的観察はマナー違反を招く恐れがあり、そもそも作品保護上至難と言える。だからこそ撮影された高画質画像が役立つ。

上述少女像の細部視認でも有効なのが画像拡大機能である。達者な筆捌きが体現する最高度の対象描出や、巧緻な明暗諧調法で成る繊細かつ劇的な陰影効果に驚きつつ、女兒が携帯する品々を隈なく確かめられる。

(3) 鑑賞学習の潤滑油として働く各種エピソード

覚える知識とは一線を画す、知ると興味が掻き立てられ面白さが倍加するような情報(つまりは雑学的知識)をエピソードと本稿では位置付け、エピソードが潤滑油となり鑑賞学習を活気付ける可能性を思案中である。

エピソードの重要性を自覚し始めたのは、ドメニコ・ギルランダイオの祭壇画の読解的鑑賞を模索していた5年程前である。以下はその時期の着想である。

「学習者が、絵の出典を成す元の話を知り、粗筋を理解し、その話の内容に沿って絵を読み解くだけでなく、話の大筋に対し、断片的であったり脈絡・関連性が弱かったりするかも知れないが、細かに派生してくる『エピソード(挿話的内容)』が増し加わる形も考慮したい。」⁴³

本質的でなくとも鑑賞者を魅了する周辺の情報は数々あろう。それらが集まると有機的関係を持ち出し、作品に彩りを添えたり陰翳豊かな表情を与えたりしながら、多種多様な解釈を紡ぐ展開も訪れ得る。エピソードに別角度から光が当たると、作品理解上、不可欠な本命的情報と化す事態も起こり得る。

大半は前稿で簡潔に取り上げたが、前稿図2で例示した「夜警」関係のエピソードは次の通りである。

「題名に反し昼間の出陣場面、『夜警』制作時の妻サスキアの死、女兒に妻の面影、銃の撃ち方の3段階図解

の挿入、後景隊員2名の間に顔〔自画像?〕、花環状縁飾り付楯に注文者18名の名前が列記、市庁舎移設時の画面切断、暴徒による三度の被害と奇蹟的修復等」⁴⁴

上掲諸項の内、「女兒に妻の面影」は史実の事項と言うよりも解釈上の問題提起の事項である。ここでは本側面を補足したい。

「夜警」制作と妻サスキアの結核の悪化は同時進行だった。「夜警」完成の1642年、サスキアが逝去。シャーマは病態の悲惨さを、「咯血するたびに隔膜が激しく痙攣する最悪の死に方だった」⁴⁵と記した。

それゆえ、相貌的類似から輝く女兒にサスキアの面影を見る態度が出てくる。この態度と連関し、ポール・クロードの「夜警」観の論考途次、稲田弘子は次の直観的見解を披露した。

『「夜警」を前にして、われわれ鑑賞者はわずかであれ
レンブラントに関する予備知識をもっていれば、画家
の私生活の悲劇を抜きにして、この作品を見ることも、
語ることも出来ない。』⁴⁶

実は予備知識が無くとも、生徒達は輝く女兒に着目した。信州大学教育学部附属松本中学校で実施機会を得た、「夜警」鑑賞授業（対象：第3学年 / 授業日：2017.2.17）における生徒達の自由解釈を前稿で一部紹介した⁴⁷が、ワークシート36枚中17枚で女兒への言及が見られ、関心の高さを物語る結果を得た。図4に一例を示す。画面構成の独自の解釈を踏まえた人物解釈も認め得る。

旗や、銃、槍の直線が平行や垂直になっている。それらの直線は、だいたい、向きが同じで左上に伸びているが、それに逆らうように伸びる。右側の長い槍と左上の大きな布の直線の延長は、中央の奥にいる、助けを求めているような、悲しそうな顔をする女性のところで交わっているので、この女性に目がいくようにしてあり、この女性がこの絵の中の主人公なのではないかと思う。

図4：「夜警」からの自由解釈（中学3年生）

自由解釈後、「少女は誰？」と問う場面で、サスキアがフローラを演じる扮装肖像画2点（1634年版と1635年版）を提示した。稲村も「レンブラントの描いた『フローラ姿のサスキア』はこの少女と大変よく似ている」⁴⁸と指摘した。「夜警」誕生の逸話を押さえることで、女兒を軸に絵の見え方が変貌し、絵を読む鑑賞行為の実質的促進が期待できるように感じた。

2-3 補充課題5種類の概容

各段階の作品理解を礎に、様々違う角度で絵に迫るのが補充課題である。主要機能は学習の肉付けで、最後に持ってくるだけではなく、活動途次適宜組み込む柔軟な仕様も想定する。ここでは前稿図2の各項説明を基に、補充課題計5項目を補説する。



図5：『伴大納言追捕のためその邸に向かう検非違使の一行』常磐光長（絵巻）、藤原教長（詞書）『伴大納言絵詞』下巻 平安末期（12世紀後半）紙本着色 本場面寸法：31.5 × 41.8 cm 出光美術館 画像出典：秋山光和、1977、『絵巻物』、原色日本の美術8、第15版、小学館、pp. 37-38

(1) 出撃シーンの東西比較

文化的差異の際立つ「夜警」鑑賞に際し、出撃シーンという共通点を持つ日本美術を対峙させるのが、東西比較の基本的意図である。

加えて、油絵の具が実現する賦彩的現実感と毛筆の線描的迫真性、つまり明暗諧調・彫塑的立体感・細部・材質感・空間等を精緻に表せる油彩画と人物の表情・動勢・姿態・性格の特徴または装飾紋様等を描出する効果の大きい線画が主体の絵巻物との比較も考慮する。

以上を踏まえ、「夜警」に対し、伝常磐光長『伴大納言絵詞（平安末期）』下巻の一場面、「伴大納言追捕のためその邸に向かう検非違使の一行」（図5）を据えた。

隊長・副官の威厳ある態度に対し、周りはどこか緊張感に欠け不統一感も漂う「夜警」と、厳しき顔貌の騎馬の指揮官らに対し、にやけ雑談に講じる随兵らの対比が、国を超え相似る点も選考基準とした。画面に線的アクセントを賦与する諸種武具の比較も興味深い。

(2) 絵を聴く

「夜警」熟視に続き絵を聴く、これが活動主題である。

シャーマは本作を「コルネリス・ドレッベル考案の機械、永久機関」⁴⁹に譬え、「銃を撃ち、太鼓を打ち、将校は叫び、犬も叫び、旗はふられ」⁵⁰と画面を循環する音響を抽出した。

以下、筆者の聴覚的観察による種々音響を前稿図2より転記する（若干補記）。

「隊長の号令、銃声、太鼓の音、歓声（どよめき）、隊員間の雑談、少女達の声（高音域）、大旗がはためく音、槍と槍が当たる音、靴音、犬の吠え声…」⁵¹

(3) レンブラントを探せ！

国立美術館で目を凝らすと、後列の旗手と鎧兜の男の

間に、出撃場面を多分背伸びして覗く者の虚ろな右目が見付かった(図2[右])。「ピロード製ベレー帽を被る自画像(1634年)」が想起されたが、顔の1/4位しか見えなくとも明らかに画家自身である。そこで、群像に埋もれるこの特異な自画像を探すゲームを提案したい。

レンブラントが聖書基盤諸作に己をしばしば登場させたことも生徒達に伝えたい。松本附中3年生には、筆者がアルテ・ピナコテークで実見し感銘を受けた「十字架樹立(1634年)」、「十字架降架(1632-33年)」を紹介した。両作に画家自身が登場する。

(4) ロールプレイ(別称ジェスチャーゲーム)

レンブラント広場の「夜警」を模す群像22体の隣で、彫像を真似て写真を撮る観光客が多いが、ここで提起するロールプレイはそういう乗りの活動である。

個別に登場人物の表情・姿勢・仕種等を真似ても、大掛かりだが全員で「夜警」大画面を再現してもよい。

「夜警」再現だと、主要人物を割り振るが、班二組で行う時は違う二役を兼ねる生徒も出てこよう。役作りは配布の複製資料やスクリーン・電子黒板等の画像を入念にチェックしながら行う(個別練習が基本)。次に全員集合し各位置に立つ。初め雑然とし、隊長役生徒の「出発!」の号令でポーズを決める演出も効果的と思う。

衣装・帽子・装身具類・各種武具を自作し、背後にアーチ、床面に段差を設ける等、舞台美術も凝りたい。

OBS ビビット校(ティルブルフ)専属写真家クレイン・ウェステルブルヘンは、美術教師フレッド・ファン・エッセンと協働し、彼が教える二学級の11歳児童が「夜警」様式で集まり、石造りの門を模す手製セットを背にポーズして学級記念写真を撮影した。写真2枚(主題はスポーツと音楽)がPetaPixelサイトに⁵²に掲載されており、「夜警」ロールプレイの発展型として参考となる。

(5) 脱整列型のオリジナル学級記念写真の撮影

「夜警」が整列状態基調の基本型から離反する特質を学んで後、変則的でも個性溢れる学級記念写真をデジカメやタブレットPCで撮る試みが提案内容となる。

現在も修学旅行・卒業記念等の学級記念写真は整列状態で撮られるのが普通だが、それを覆したい。

参考作例として、写真館様式を逸脱した浅田政志の家族肖像写真(浅田と父母兄4名がラーメン屋・消防士・ロックバンド等を熱演)⁵³を生徒達に示したい。

3 おわりに

以上、絵画鑑賞の多角の方途を模索し、絵画理解と共に西洋理解にも近付き得る、「夜警」の重層的読解を重

んじる7段階鑑賞学習プログラムを論じた。続篇となる本稿で扱ったのは、第2・4・7段階である。

現在、学習指導要領改訂で小・中義務教育課程ばかりが高校段階をも貫く学習理念とされた「主体的・対話的で深い学び」の実質的推進も視野に入れた心算である。

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」と題す中教審答申に、主体的・対話的・深い3項の学びの特質が整理されている⁵⁴。「夜警」の読解的鑑賞との関係で着目したのは深い学びである。答申は、その実質を、「知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすること」⁵⁵とした。それは筆者が考える読解とほぼ同義である。

本稿との関連では、集団肖像画と近く、設定は特異だが、「フェリペ4世の家族」との別称を持ち、家族肖像画の範疇にも入れ得るベラスケス「宮廷の侍女達(ラス・メニーナス)(1656-57年)」を何れ取り上げたい。

書籍・学術論文・授業実践報告等に学びつつ、日本の子供達に届けたい西洋絵画を選定し、各作品の性質に応じて読解的鑑賞の種々展開を今後も図ってゆきたい。

[謝辞]

「夜警」自作題材の検証授業をご支援戴いた鹿野耕平教諭(信州大学教育学部附属松本中学校[美術科])と生徒皆様に深く感謝致します。

[付記]

本研究に当たり、日本学術振興会の平成30年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金(基盤研究(C))「美術を通じた西洋理解」を推進する読解ベース型鑑賞指導メソッドの研究と題材構築(課題番号JP16K04679)の援助を受けた。

[註]

- 岡田匡史, 2018, 「レンブラント「夜警(1642年)」の鑑賞題材化(7段階鑑賞学習プログラム)の試みI—集団肖像画の読解的鑑賞の一局面(観察・記述と自由解釈を中心に)」、『美術教育学研究—大学美術教育学会誌』, 50, 大学美術教育学会, pp. 121-128
- オランダ集団肖像画全般は文献①を、画家・作品・時代背景等を総合的かつ詳細に扱うレンブラント論は文献②を、「夜警」要点を網羅する俯瞰的概論は文献③を、加えコンパクトな手引きとして④を参照した。①アロイス・リーグル、勝國興(訳), 2007, 『オランダ集団肖像画』, 初版, 中央公論美術出版, ②サイモン・シャーマ、高山宏(訳), 2009, 『レンブラントの目』, 初版, 河出書房新社, ③マリエット・ヴェステルマン、高橋達史(訳), 2005, 『レンブラント(岩波世界の美術)』, 第1刷, 岩波書店, ④パスカール・ボナフー、高階秀爾(監修), 村上尚子(訳), 2005, 『レンブラント—光と影の魔術師』, 知の再発見叢書98, 初版・第2刷, 創元社, 以上四篇。
- 神林恒道, 2011, 「レンブラント・ファン・レイン《夜警》1642年」, 神林恒道, 新関伸也(編著), 『西洋美術101—鑑賞ガイドブック』, 初版・第3刷, 三元社, pp. 82-83
- 堀典子, 2003, 「『視覚造形作品を体験し理解する』—芸術受容への導入/解釈の試み」, 堀典子(研究代表者), 『鑑賞と表現の統合を図る(一体化を目指す)鑑賞教育の方法論に関する研究—ドイツの後期中等教育における実践事例の分析をふまえて/平成13-14年度

- 科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書』, pp. 302-332
- 5 詳細は前稿「5 題材設計上の重点事項」掲載の図2「7段階(15項目)の授業計画」を参照。岡田, 前掲, p. 125
- 6 シャーマは、「この絵のどこに目をやろうと、正確な計算と奔放の筆捌きのこの本能的な結びつきの証拠に驚かさずにはすまない」と彼が絶賛するレンブラント「ヤン・シクス肖像(1654年)」を挙げ、個性的な種々筆法を列挙して後、「こうしてみるとこの一幅、画法百科なのだ」と結論付けた。「夜警」も同じ賦彩系譜に属す。シャーマ, 前掲(2)-④, pp. 591-592 参照。レンブラントが徒弟期に習熟した油彩技法全般(特に顔料と溶剤)については、同, pp. 222-223 に詳しい。
- 7 図2, 岡田, 前掲, p. 125
- 8 推察根拠は菅澤薫のメディウム研究である。菅澤は、亜麻仁油を太陽光に長時間晒し酸化重合を促して得られるサンシクンド・オイル(粘度・光沢等が重合亜麻仁油と似るが速乾性)に着目し、そこに鉛を加え加熱処理してできる調合油をレンブラントが使った可能性を、検証実験を通じ示唆した。菅澤薫, 2017, 「レンブラント・ファン・レイン作《マルハレター・デ・ヘル》の白絵具(鉛白)に使用されたメディウムについて—リンシードオイルの加工法を中心に」, 『芸術学研究』, 22, 筑波大学大学院人間総合科学研究科, pp. 31-40 グザヴィエ・ド・ラングレ, 黒江光彦(訳), 1977, 『[新版] 油彩画の技術—(増補) アクリル画とビニル画』, 再版, 美術出版社, pp. 202-206 参照。美術情報サイト『Art Annual online』(美術年鑑誌)掲載の「[画材考] 洋画家 株田昌彦」で関連情報が得られる。http://www.art-annual.jp/column-essay/column/56079/ (2018年8月24日アクセス)
- 9 ド・ラングレ, 同, p. 203
- 10 シャーマ, 前掲(2)-④, p. 629
- 11 同, 同頁。
- 12 ケネス・クラーク, 高階秀爾(訳), 2004, 『絵画の見かた』, 白水社, pp. 106-107
- 13 以下, 晩期諸作を総括するシャーマの関連の分析である。「絵画行為が何かの主題中に解消するとか、主題と反響し合うとかいう次元を越えて、最晩年十年のレンブラントは絵具自体を主題とするところにまで突き抜けた。」シャーマ, 前掲(2)-④, p. 629
- 14 シャーマ, 前掲(2)-④, p. 638
- 15 立原慶一, 2015, 「フェルメール作『手紙を読む女』と『牛乳を注ぐ女』の比較鑑賞論—美的特性及び主題の感受を中心に」, 『美術教育学—美術科教育学会誌』, 36, 美術科教育学会, p. 280
- 16 兼重譲, 1980, 「29 夜警(作品解説)」, 『レンブラント』, 世界美術全集 13, 第2刷, 集英社, p. 101 参照。
- 17 同, p. 102
- 18 ケネス・クラーク, 尾崎彰宏, 芳野明(訳), 1992, 『レンブラントとイタリア・ルネサンス』, 叢書・ウニベルシタス 308, 初版, 法政大学出版局, 1992, pp. 116-120 参照。
- 19 シャーマ, 前掲(2)-④, p. 509
- 20 同, 同頁。
- 21 同, 同頁。
- 22 同, 同頁。
- 23 同, pp. 509-510 参照。
- 24 ハインリヒ・ヴェルフリン, 梅津忠雄(訳), 2004, 『美術史の基礎概念—近世美術における様式発展の問題』, 初版・第3刷, 慶應義塾大学出版会, p. 253
- 25 藤井聡子, 梶木尚美, 2016, 「絵画の読み解きで、時代をつかむ!—17・18世紀のヨーロッパ(地歴科[世界史]授業案/2015.11.21実施)」, E.FORUM 第11回実践交流会資料, 京都大学
- 26 平成29年版学習指導要領がカリキュラム・マネジメントの観点から小・中・高通じ推奨する方向軸が、「教科等横断的な視点」である。本方針を受けた形で、『教育美術』誌では図工・美術と他教科の横断的連携授業の特集が組まれた。「教科を超えて学び合う授業」, 2018, 『教育美術』, 79(9 or 915), 公益財団法人教育美術振興会, pp. 13-39 参照。
- 27 藤井・梶木, 前掲, pp. 3-4
- 28 同, p. 3
- 29 同, p. 8
- 30 第13章「夜警」, 第15章「布地組合の見本鑑査官たち」, ウジェーヌ・フロマンタン, 2004, 高橋裕子(訳), 『オランダ・ベルギー絵画紀行—昔日の巨匠たち(下)』, 岩波文庫 579-3, 第5刷, 岩波書店, pp. 116-161, pp. 193-204 参照。
- 31 藤井, 梶木, 前掲, p. 2
- 32 岡田, 前掲, pp. 122-123 参照。
- 33 小林頼子, 1994, 「肖像画とトロニー—レンブラントの場合」, オランダ政府美術庁(構成・監修), 東京ステーションギャラリー / 中山三善・池上浩生(編集), 『17世紀オランダ肖像画展(図録)』, p. 27 参照。
- 34 「5-2 観察成果に則る自由解釈の展開」, 岡田, 前掲, pp. 125-127 参照。
- 35 シャーマ, 前掲(2)-④, pp. 509-510 参照。
- 36 同, p. 506
- 37 See “Militia Company of District II under the Command of Captain Frans Banninck Cocq, Known as the ‘Night Watch’, Rembrandt van Rijn, 1642” in Rijksmuseum HP. <https://www.rijksmuseum.nl/en/collection/SK-C-5> (2018年6月10日以降, 継続的アクセス) 同様な細部視認は, Google Arts & Culture (アムステルダム国立美術館との提携)でも可能である。<https://artsandculture.google.com/asset/the-night-watch/eQEojRwTdypUKA?ms=7B%22x%22%3A0.5%2C%22y%22%3A0.5%2C%22z%22%3A8.56520048303178%2C%22size%22%3A%7B%22width%22%3A2.1378664768551587%2C%22height%22%3A1.2375000000000003%7D%7D> (2018年9月1日アクセス) 拡大箇所を移動しながら、「夜警」理解に好適な計7項目の解説を楽しめる Google Arts & Culture のサイトも有益だと感じた(表記は英語 [Google 翻訳機能付き])。https://artsandculture.google.com/story/dALSivMco4xIJA (同日アクセス)
- 38 兼重, 前掲, p. 103
- 39 シャーマ, 前掲(2)-④, p. 512
- 40 同, 同頁。
- 41 ヴェステルマン, 前掲(2)-④, p. 171 参照。
- 42 同, 同頁参照。
- 43 岡田匡史, 2013, 「ドメニコ・ギルランダイオの祭壇画(聖子礼拝図)2点の読解的鑑賞(試案)—テキスト, 図像学, アトリビュート(象徴的特物)」, 『第35回美術科教育学会 鳥根大会 研究発表概要集』, 美術科教育学会, p. 59 エピソードの一例として, ヤン・フェルメールに特徴的な画中国画に関し, クラーク卿が提供する以下情報を挙げたい。「彼の父親は画商であり, 父の死後, ヤンはその跡を継いだ。そのため, 彼は自分の室内を飾るための美術品はたっぷり持っており, それらを画面に提示するのに特別の関心を払った。」クラーク, 前掲(12), p. 124
- 44 図2, 岡田, 前掲, p. 125
- 45 シャーマ, 前掲(2)-④, p. 514
- 46 稲田弘子, 1994, 「クローデルとレンブラント—『夜警』に見る「解体」」, 『聖徳大学研究紀要短期大学部』, 27(III), 聖徳大学短期大学部, p. 71
- 47 表6「『夜警』からの自由解釈③」, 岡田, 前掲, p. 127 参照。
- 48 稲田, 前掲, p. 72
- 49 シャーマ, 前掲(2)-④, p. 504
- 50 同, 同頁。
- 51 図2, 岡田, 前掲, p. 125
- 52 See “An Elementary School Class Photo in the Style of ‘The Nightwatch’ by Rembrandt” in PetaPixel HP. <https://petapixel.com/2015/12/28/an-elementary-school-class-photo-in-the-style-of-the-nightwatch-by-rembrandt/> (2016年6月16日以降, 継続的アクセス)
- 53 浅田政志, 2008, 『浅田家(写真集)』, 初版, 赤々舎参照。
- 54 中央教育審議会, 2016, 「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)【概要】」, p. 8 参照。
- 55 同, 同頁。